

佳作

応援してくれる人の大切さ 秋田県立秋田南高等学校中等部 2年 岡見 星祈

私は、中学校に入学してから、陸上競技部に所属している。迎え入れてくれた先輩、支え指導してくださる先生、つらいことも楽しいことも一緒に乗り越える仲間と出会うことができた。今年度は新しい後輩もできた。部活動をする時間は、私にとって学校生活の中でも一番好きな時間だ。

去年の4月、私は屈辱を味わった。入部したての春季記録会でのことだ。100メートル走に出場した私は、スターティングブロックの用意をし、精いっぱい走ることしか考えられない状態だった。ゴールしたが、今まで見たこともない遅いタイム。私は、涙も出ないほど悔しかった。でも、その悔しさを大きく越えるのは、恥ずかしさであった。

それから、私は上を目指して懸命に練習に励んだ。両親に自分の走りを見てもらっては何度もアドバイスをもらい、多くの課題を見いだせた。部の先生にも相談し、課題の克服へと一歩ずつ進み始めた。春季記録会以降、私は周りの人々に支えてもらいながら、たくさんの努力を積み重ねた。やがて、それは自信へとつながった。

そして迎えた2カ月後の市中総体。朝起きてから、緊張で鼓動が収まらなかった。両親が車で私を送ってくれる間、私のお気に入りの曲やモチベーションが上がる曲を聴かせ、励ましてくれた。競技場に到着して車を降りようとした私を、二人で精いっぱい応援し、送り出してくれた。そのおかげか、緊張が少しほぐれた。予選のレース直前は、不思議と冷静な自分がいた。共に高め合った仲間、実力向上のために指導にあたってくださった先生、そして誰よりも近くで支えてくれている家族の顔が次々と浮かんだ。私は、祈りを込めてスパイクの紐をきつく結び、スターティングブロックへと向かうと、今までの練習での苦労や努力、喜びが鮮明によみがえってくる。今日こそできる。なぜかそんな気がした。ピストル音が鳴るとともにスタートラインから勢いよく飛び出した。2度目の100メートル走は、長いようでいて一瞬だった。しかし、確かなことは、風と一体化できたことだ。予選では春のタイムを約2秒更新することができた。そして、初の決勝進出が決定。とてもうれしかった。それと同時に、再び自分を奮い立たせた。

やはり、決勝前はものすごい緊張感に襲われた。日々練習を重ねてきた自分の得意とするスタートダッシュでフライングをしないか、とても不安になった。

しかし、先生の「不安になったときは失敗する自分ではなく成功して喜んで
いる自分をイメージして」という言葉を思い出した。そうすることで、自信を取
り戻せた。自分の実力を信じてスタートラインにつく。

——オンユアマークス。ゆっくりと深呼吸する。——セット。全身に大きな力
を込める。

ピストル音が大空に鳴り響く。懸命に地面を蹴る。蹴る。蹴る。もう二度と
後悔したくないから。周りの人々の期待を裏切りたくないから。それは、14秒
にも満たないような挑戦だった。ゴールラインを踏み越えた私を大きな達成感
と安心感、喜びが包んだ。私は、春の雪辱を果たすことができたのだ。そして、
仲間や先生、両親への感謝の気持ちでいっぱいだった。

今年の春に味わった屈辱は、今でも忘れることはない。人は、悔しい思いや
悲しい思いを知って初めて成長する。そして、努力は決して裏切らない。努力
をするたびに目標を達成できるわけではないが、いつか必ず報われるときがく
る。しかし、それは支えてくれる人々の存在がなければ実現できないと感じて
いる。

陸上で経験した数々の思い出は、私を成長させてくれた。また、大切なこと
を教えてくれた。それは、陸上だけに限ったことではない。私が未来の自分に
伝えたいことは、これから先どんな壁にぶち当たっても、人一倍の努力を重ね
ると、必ず乗り越えられるということ。自分を支えてくれる人々の存在があっ
てこそ今の自分がある。もちろん、うまくいくことばかりではないだろう。し
かし、自分に期待し、応援してくれる人たちのために、そして自分のために、
どんなことも諦めずに精いっぱい取り組んでいきたい。そしていつか、成長し
た姿で感謝を返したい。